

株式会社 J-オイルミルズ



company profile *

- 設立: 2002年
- 資本金: 100億円
- 従業員数: 1070名
- 本社: 東京都中央区
- 売上高: 1600億円
- <http://www.j-oil.com/>

コスト削減や維持管理 業務の簡素化を狙いに バックアップ環境を 見直す

3社合併によるデータ量増大で 障害対策に着手

2004年7月、いずれも油脂製品の製造・販売に携わるホーネンコーポレーション、味の素製油、吉原製油の3社が合併統合することで誕生したのが新生、J-オイルミルズである。事業の柱は、家庭用油脂と業務用油脂および加工用油脂の3つ。家庭用製品では、「AJINOMOTOサラダ油」「豊年サラダ油」「ゴールデンサラダ油」など、キッチンでお馴染みの人気商品を数多く製造する。

3社の合併は、生産・物流・原料調達、営業・研究開発・マーケティングの各分野で、多くのシナジー効果を生み出した。2004～2006年度の第1期中期経営計画では、120億円の収益改善の施策に取り組み、順調に成果を挙げている。

合併に際してのシステム統合では、受注・出荷を軸とする販売管理系は、ホーネンコーポレーションが使用していたiSeriesへ、生産管理・原価管理および資材調達のいわゆる工場系は味の素製油が運用していたWindows上の生産管理システムへ、そして財務会計については新たにPCサーバー上でERP製品を導入し、EAI基盤で統合する新たな情報環境が構築された。

同社はiSeries上で処理するデータ量が、合併後は

3社分に膨らむことで、障害対策の必要性を認識し、対応策を検討した。まず当時使用していた「iSeries 810」では、増大するデータ量に対応できないため、新たに「iSeries 825」を導入。これを本番機として使用する一方、「iSeries 810」をバックアップ機とし、あるHA(ハイ・アベイラビリティ)製品を導入することで二重化体制を構築したのである(両マシンはどちらも本社のコンピューターーム内に設置されているため、災害対策は目的としていない)。

「合併から約3年が経過し、統合後のシステム運用がやっと安定期に入りました。大きな山場を越し、システム部にも余裕ができたので、今年の春頃から、統合後のシステム環境について、運用性や効率性およびコスト面を中心に見直しを図ることになりました。そして真っ先に検討課題として浮上したのが、iSeriesのバックアップ環境だったのです」と語るのは、システム推進部の鳴釜良夫部長である。

HA製品のリプレースで 煩雑な維持管理の解消へ

合併直後に導入したHA製品は、ライセンス価格が高額であったのに加え、維持管理の煩雑さが担当者を悩ませていた。

「構築時の設計に問題があったのか、データベースの



鳴釜良夫 氏
システム推進部
部長



宮前重幸 氏
システム推進部
課長



森山徹也 氏
システム推進部
課長代理

JOURNAL/400

開発・販売元 ヴィンキュラム ジャパン

導入のポイントと評価

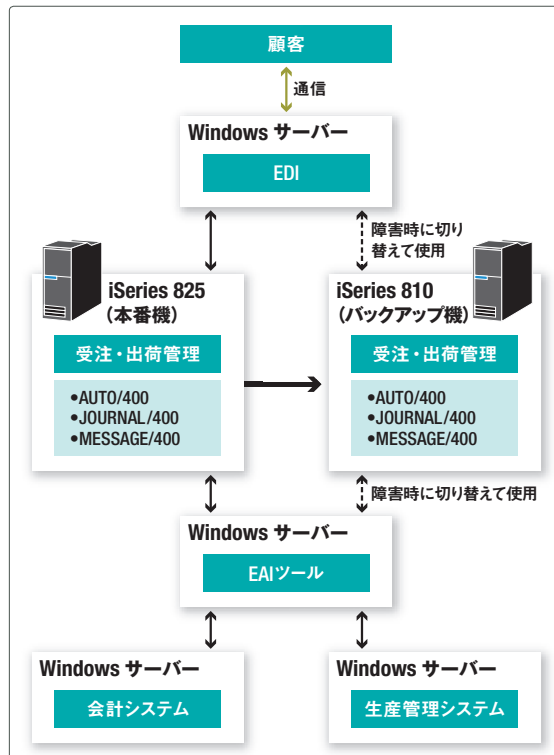
- ★ **ライセンスコストと保守費を大幅削減**
- ★ **余分なジャーナル発生を抑え、ディスク効率向上**
- ★ **「AUTO/400」との連携でロールバックを指定**

災害障害対策

変更に対してバックアップの同期がとれないという問題が生じていました。当社ではわりと頻繁に、プログラムの改良や追加に伴うデータベースのレイアウト変更などが生じるのですが、そのたびに完全な同期がとれなくなり、再設定作業を行うことになりました。その業務が非常に膨らんでいました」と、システム推進部の宮前重幸課長は指摘する。

またライブラリーコピーが発生してジャーナル対象が増えると、ミラー対象にはならないジャーナルが増殖するという現象も発生し、ディスクへの負荷を高めていた。

そこでコストの削減、維持管理業務の低減、そして不要なジャーナルをなくし、運用を簡素化するという狙いの下、HA製品のリプレースに着手することになった。



図表 J-オイルミルズのシステム構成

同社が、新たなHA製品として採用を決めたのが、データミラーリングツールとして実績のある「JOURNAL/400」(ヴィンキュラム ジャパン)であった。

製品を決定したのは、今年6月。「JOURNAL/400」への切り替え目標を9月とし、即座に移行計画の策定に入った。

基本計画の骨子は、以下のとおりである。

まず障害発生時のバックアップ機への切り替えは、日中は30分以内、夜間はオンラインを開始する午前8時30分まで、を目標とする。夜間バッチ処理の対応は、基本的にすべて同じオペレーションで対応する。ただし、夜間バッチの初期処理で実行しているファイルクリアなどのクリア処理がある場合は、ポイントごとのセーブファイルから復元実行する。そして夜間バッチ前の復元は、ロールバックをするかしないかの判断のみで対応する(ロールバックとは障害発生時、記録してあるチェックポイントまでデータを巻き戻して、改めて処理を開始すること)。

無駄なジャーナルの発生を抑え ディスクを効率化

同社は今回の決定以前から、夜間バッチジョブのスケジューリングなどに、同じヴィンキュラム ジャパンのシステム自動運用パッケージ「AUTO/400」を使用していた。そこで、障害発生時の切り替えに際してはこの「AUTO/400」を連携させ、ロールバックの指定などを設定している。

そして今年9月、予定どおり「JOURNAL/400」を使用した新しいバックアップ環境が動き出した。

新システムでは、ライブラリーコピーが発生してジャーナル対象が増えても、1日1回の差分チェックにより対象から外すので、無駄なジャーナルの発生が抑えられるようになった。これは、本番機側のディスク軽減に役立っている。また、本番機側のミラー停止時間が解消され(以前は夜間のジョブ実行時、ミラー転送が停止していた)、スプールファイルもミラー対象とすることができるようになった。

「当初の狙いどおり、夜間の煩雑な作業を含めて、二重化に関する業務を大幅に簡素化することができました」(森山徹也課長代理 システム推進部)

同社は現在、J-SOX法への対応を進めているが、その一環としても、障害対策の強化は大きな役割を果たしているようだ。

①